

スタジオジブリの「風立ちぬ」という映画があります。この8月の終わりにもテレビ放映されていました。あの映画を観ると、主題歌を聴くと、私は否が応にも2013年の夏を思い出すのです。

私の父は寡黙な人で、時々やりとりするメールもそっけないものでした。ただ、喋る時とは違うユーモアが含まれてることがよくありました。8月の半ば、和歌山のおじいちゃんちにいた私に、王今しく父から長めのメールが届きました。それは「風立ちぬ」を観てきた感想が綴られていて、今までそんなメールをもらったことがなく、新鮮さと同時に不思議にも思えました。そしてよっぽど心に響くものがあったのだなあと思えました。私も同じその映画の招待券をもらっていたので、帰京後、息子らの子守を頼んで産後初1人映画タイム!が、「風立ちぬ」でした。そのほんの数日後、長文メールからは1週間後、父は突然亡くなったのでした。登山途中に倒れ帰らぬ人となりました。その悲しすぎる出来事と大きな喪失感は、当時神様と教会から離れて放蕩していた私を神様の元へと引き戻すきっかけとなったのでした。あれほど苦手だ、嫌だ、と思っていた教会の兄弟姉妹たちが、本当の愛と優しさを持った人たちであることをしみじみ感じ、悲しみに満ちた心が癒えていくのを感じました。その愛の姿から私は再び神様と、その愛と向き合い、新たに「生きる」ことができたのです。放蕩歴約10年。

しばらくは父の思い出が強すぎて「風立ちぬ」は観られませんでした。しかし、先日久しぶりにテレビを通し観ることができました。難病のヒロインは最後、自分の死期を悟り、夫や家族の元を去ります。最期どうなったのかは描かれませんが、その時夫は風の中で「生きて」という声を聞き、草原を去る彼女の姿を見ます。私はそこに父が重なり、数年ぶりに泣いてしまったのでした。

まさかばでひとやすみ

